

C 184 フロイスの『日本史』における食に関する記述について
女子栄養大栄養 松本伸子

目的 狩野文庫架蔵の『南蛮料理書』は、南蛮の菓子や料理などの製法を一冊にまとめた唯一の書として知られているが、本書の成立、内容などについては未だ不明な点も多い。キリスト教布教の禁止から鎖国へと至った経緯から南蛮に関する資料は乏しく、宣教師の書翰、年報など南蛮資料の中においても、食物に関する事柄を目にするには更に難かしい。従って参考となし得るものは右記に集められることが望ましく、中でもフロイスの『日本史』は、当時の宣教師の生活を知る上で貴重なものであることから、本書ととりあげて内容を検討することとした。

方法 フロイスの『日本史』は、1549～1593年の間を12巻に収めて中央公論社から刊行されたものを資料とした。本書を通読して、食べ物に関する全ての記述を採録し、それを豊後、五畿内、下の3教区、年代別などに分け、日本人と宣教師との間において食べ物などのように介在したかについて検討した。また記述されたものの解釈にあたっては、ヴァリニャーノの『日本諸事要録』に示されたことを参考にした。

結果 食物、食事に関する事例を教区別、時代別に分けると1550年代は主として豊後、1560-1570年代は五畿内、1570-1590年の間は西日本にそれぞれ多くみられた。食物、食事のやりとりについては、キリシタンから司祭をはじめとするイエズス会への贈与が90%を占め、その逆の例は極めて少なかった。食事の中には奥白、公方などの饗応も含まれ、更に茶の湯をふるまう例も少なからずみられた。また日本人は従来、卵や牛肉を食べることを忌み嫌ったが、嗜好的にはそれらを好むと指摘している。